

奨励研究 研究報告書

研究課題

芦屋釜の鑄造技術的研究

芦屋町教育委員会芦屋釜の里学芸員

新郷 英弘

一. はじめに（研究の目的）

芦屋釜は、筑前国芦屋津金屋（現在の福岡県遠賀郡芦屋町中ノ浜）で製作された鑄鉄製の茶の湯釜である。その職人集団は芦屋鑄物師とよばれ、茶の湯釜だけでなく、梵鐘、鰐口、香炉、銅像、掛仏など、仏教具を中心とする様々な鑄物製品を製作した。芦屋金屋の発生は、梵鐘が造られた時期からみて十四世紀半ば頃と推定され、芦屋釜の始まりもその時期を遡ることはないと考えられる。十五世紀初頭には、芦屋釜と思われる釜が記録にあらわれることから、その製作の始まりは十四世紀以前に遡ることは間違いない。すなわち、芦屋釜が製作され始めた時期は、十四世紀後半頃とみてよいだろう。十五世紀には、京の貴人の日記類に芦屋釜の名が散見され、贈答品として高い人気を博したことがうかがえる。特に文明十年（一四七八）の大内政弘による筑前奪還以後、大内氏やその関係者から、足利義政や義尚らをはじめ、室町幕府周辺の人々に、多数の芦屋釜が贈られたことが記録にみえる。十五世紀後半は芦屋釜需要の最盛期であったといえるだろう。しかし、十六世紀になると、芦屋釜の名は記録にほとんどみられなくなる。侘び茶の考え方が広まるにつれ茶人の道具の好みが変わ化したことや、芦屋鑄物師の庇護者であった大内氏が滅亡したことなどによって、江戸時代初期頃にはその製作が途絶えたと考えられる。

現在、国指定重要文化財の茶の湯釜九点のうち八点までを芦屋釜が占めており、その美術工芸品としての評価は高い。一方で、近世以降、多くの芦屋写しが造られ、それらが芦屋釜として流通しているものも極めて多い。また、芦屋釜の特徴である真形の形状や、胴部の文様などの一要素が芦屋釜鑑定の基準となり、筑前芦屋産以外の茶の湯釜を芦屋釜として大量に流通させることとなった。芦屋釜は、真贋という点において混沌とした状態にあるといえよう。

本稿では、芦屋釜の鑄造技術の解明を目的とする。鑄造技術は、産地や集団ごとにそれぞれ伝承された技術があり、それは製品に特有の痕跡を残すことがある。その痕跡から技術を紐解いていくことで、それぞれの集団の技術的特徴を探ることは、将来的に釜の分類や編年を行うための有力な情報となるものと思われる。そのため、本報告では筑前芦屋産以外の釜を調査資料に選定することを極力避けたいと考えた。そこで、以下の条件を設定し、調査資料を選択した。

①形状が真形釜であるもの。もしくは、替底などで原形をとどめない場合、真形釜であったと推測されるもの。

②鑲付が鬼面であり、細部まで表現された厳しい表情のもの（後世の芦屋写しと考えられるものの中には、鑲付の表情が細部まで表現されず、甘い表情のものがあるため）。

③釜肌を故意に荒らしていないもの（肌を荒らして古作にみせる考え方は、侘び茶の隆盛以降の考え方と思われるため）。

④中子（中型）が挽き中子法によって製作されたと考えられるもの。すなわち、内部に挽き目があるもの、もしくは内面に凹凸がなく挽き中子法による中子成型と考えられるもの（詳細後述）。

ここでは以上の条件に合致するものとして、調査作品の中から芦屋釜の鑄造技術的特徴が顕著な次の作品を選択した。以下、芦屋釜の里の茶の湯釜製作工程にそって、芦屋釜の鑄造技術の考察を行う。なお、芦屋町から出土した無地平釜についても、参考資料として取り上げてみたい。

芦屋松竹図真形釜（湯木美術館蔵）（図1）

芦屋霰地真形釜（美術工藝振興佐藤基金蔵）（図2）

重要文化財 芦屋霰地松梅図真形釜（根津美術館蔵）（図3）

芦屋霰地真形釜（芦屋釜の里蔵）（図4）

無地平釜（芦屋歴史の里蔵）（図5）

二. 茶の湯釜の製作工程と考察

①紙型・下絵

釜の形状や鑲付など全体のデザインを決め、縦断面図を実寸で紙に描き、切り抜く。これを紙型という。また、釜の文様となる下絵を決める。

② 外型造型・ヘラ押し

紙型の半面を木や鉄の板に写し取り、回転させるための軸と取っ手となる横木を取り付けて挽板を作る。型枠の中に、鋳物土を荒い土から徐々に細かくしながら塗りつけ、挽板を回転させて外型を造型する。外型の表面が乾かないうちに下絵を描いた和紙を水張りし、それにそってヘラ押しする。

【考察】芦屋釜のきめ細かい鉄肌は鯰肌ともいわれ、外型造型に細かい粒度の肌土を用いたことがわかる。芦屋鋳物師の工房跡である芦屋金屋遺跡からは、胴部に霰文を施文した真形釜の羽部の鋳型が出土しており(図6)、その断面も鋳物土の粒度によって層状になっていることから、現代の外型造型法と大きくは変わらないものと想定される。

ヘラ押しに関しては、文様際に凹状痕跡がみられる(図7・図8)。これは、文様のヘラ押しの際、ヘラの筆致が早く、文様周辺の土が盛り上がることによって製品に凹状の痕跡が残ったためと考えられる。現代の釜師の多くは、和紙に墨で絵を描きそれを鋳型に水張りして、その上からヘラ押しする方法をとる。一方、芦屋釜の場合は、直接鋳型に墨などで下絵を描きヘラ押しするか、和紙を水張りしてヘラ押しし、ある程度あたりをつけたのちに、和紙をはがしてヘラ押ししたものと考えられる。同様の凹状痕跡は、重要文化財芦屋浜松図真形釜(東京国立博物館蔵)、重要文化財芦屋浜松図真形釜(文化庁蔵)などにもみられる。

③ 鑢付

鑢付は、粘土で造った原型を焼成して固め、それに薄く土を付けて原型の形を抜き取り、鑢付の穴となる芯を付けて鋳型とする。外型を掘り込んで穴をあけ、そこに鑢付の鋳型を埋めこんで周囲を補修する。鑢付の原型は破損しない以上何度も使用でき、同じような鑢付をいくつも製作できる。

【考察】芦屋釜の製作当時も同様な方法だったと想定されるが、同じ鑢付の原型を用いたと考えられる作例は極めて少ない。その稀有な例として、芦屋松竹図真形釜(湯木美術館蔵)と芦屋霰地真形釜(芦屋釜の里蔵)を挙げておきたい(図9・図10・図11)。芦屋松竹図真形釜(図9)は、原型から被せた土を抜き取って割り口を補修する際、若干鼻先がつぶれたようであるが、それ以外の形状や大きさはほぼ同じであり、同じ原型を用いた可能性が高い。さらには、釜自体の形状や寸法、胴部の鑢付の位置なども近似しており、同じ挽板を用いたのではないかと思われる。一枚の挽板から数個の釜造りをすることは特に珍しいことではないが、今に残る芦屋釜に関していえば、そのような例は極めて稀であり注目される。

また、鑢付の原型に土を被せて形を抜き取る際、そのままでは抜きにくいいため、鬼面の鼻先より上部、もしくは下部のどちらかを、中心から縦二つに割って原型を抜き取る。芦屋霰地松梅図真形釜の鑢付の頭頂部には、バリ¹がさしているところから(図12)、鑢付鋳型の上部を割って原型を取り出したことがわかる。このような細かいところにも、産地や職人集団の違いがあらわれてくるもので、芦屋鋳物師の技術的特徴の一つといえるだろう。なお、それに近い頭頂部の痕跡は、重要文化財芦屋無地真形釜(相国寺蔵)などにもみることができ。

なお、芦屋釜の鬼面鑢付については、その表現法から大きく二種類に分類できるものと思われる。それは、頭上にこぶ状の表現を施し鼻筋が一本のタイプ(図9・図10・図11)と、頭上に巻髪風の表現を施し鼻筋が二本のタイプ(図12・図13)である。この違いは、製作集団による差異とも考えられ、後者は大江宣秀の作例である芦屋霰地松梅図真形釜が知られることから、芦屋鋳物師の中で最も多くの作品に名を残す「大江」系の鑢付とみることもできる。調査点数が増えれば、将来的に芦屋釜の分類や編年を行う際の重要な要素となると思われ、問題提起として一言記しておきたい。

④ 中子造型²

中子は釜の内側の鋳型であり、釜の厚みの分だけ、外型との間に隙間ができるよう考慮して造

型する。芦屋釜の中子造型は、挽き中子法という技法を用いている。挽き中子法とは、中子の縦断面の形を切り抜いた挽板を回転させ、それに土を付けながら鑄型を造型する方法である（図14）。梵鐘や花生等の中子造型には、現在も挽き中子法を用いることがある。芦屋鑄物師活動期の製作に関する史料は全く残っていないが、宝永六年（一七〇九）成立の『筑前国続風土記』土産考の芦屋釜の条には、「京江戸の釜匠も、芦屋流に伝ふる引中心ヒキナカゴと云精巧の法を知らず」と記されており、「引中心（ヒキナカゴ）」法が、芦屋鑄物師の伝統だったことを伝えている。ここでは、現代的な表記に直し「挽き中子」を用いる。

【考察】芦屋釜の中子を実見すると、口裏に同心円状の筋状痕跡が残るものがある（図15）。これが挽き中子法の痕跡である。芦屋釜の里の製作実験から、挽き中子法を用いても必ずしも挽き目が入るわけではないことがわかってきたが、総じてその内部は凹凸がなく美しい。この挽き中子法の痕跡は、芦屋釜をみる上で最も重要な技術的ポイントである。

⑤ 中子納め

外型・中子を焼成し、それらに鉄の焼きつきを防ぐための煤や黒味（炭汁）を塗布する。外型（上型）に中子を納め、厚みを保つための鉄の型持かたもちをおいて外型（下型）を被せる（図16）。

【考察】芦屋霞地真形釜（美術工藝振興佐藤基金蔵）には、口裏内部に一条の段差がみえる（図17）。この痕跡は、外型に中子を納める際、幅置はしきの部分が若干合わず、中子が浮いたためにできた痕跡と考えられる。これは外型と中子の鑄型を別々の挽板で造型する挽き中子法に稀にあらわれる痕跡であり、挽き中子法を用いた傍証ともなる。芦屋釜の里における復元製作においても、同様の痕跡がみられた（図18）。なお、これに近い痕跡は、重要文化財芦屋無地真形釜（相国寺蔵）にもみられる。

⑥ 鑄込み（吹き）

甗かまど炉（溶解炉）に木炭と鉄を交互に入れて熱し、鉄を溶かす。溶けた鉄を杓で受け、鑄型に流し込む。なお、芦屋金屋遺跡からは、甗炉を据えるための基底部が出土している。

【考察】芦屋釜の胴部の厚みは、薄いもので二ミリ程度のももあり、明らかに軽さを意識して製作されたことがわかる。薄物の製作には、甗炉による金属溶解が適していることが、近年の芦屋釜の里の製作実験によって明らかにされつつある。

溶湯は鑄型の釜底にあたる部分に設けた湯口から流し入れる。芦屋釜で製作当初の底を残す例はほとんどなく、未だその例を知らない。伝承では、芦屋釜の湯口は梵鐘などと同じように一文字形の湯口であったとされているが、実際はよくわからない。芦屋町出土の無地平釜は、中子成型に挽き中子法を用いているとみられ、芦屋鑄物師に関連するものと考えられるが、その底は生底であり、湯口は丸湯口である（図19）。あるいは、芦屋釜の湯口も丸湯口であったかもしれない。

⑦ 仕上げ

吹きの日、鑄型から釜を取り出す。砥石や土を付けたワラなどで表面や内面をみがき、整える。釜の表面を錆びさせ、錆色をつける。

三. おわりに

本報告では、芦屋釜に残る痕跡から芦屋釜の鑄造技術の解明を試みた。頁数の制約からすべての調査資料を掲載できなかったが、いずれ発表の機会をもちたい。これまでの調査で、芦屋真形釜に関しては鑄造技術に関するデータが徐々に蓄積されている。今後は、他産地の釜の鑄造技術についても調査を行い、可能な限りその産地の特異な技術を明らかにしたいと考えている。ひいては、各産地の釜の学術的分類を、多少なりとも進めることができればと思う次第である。

なお、『野村美術館研究紀要』第19号の拙稿「芦屋釜の鑄造技術」（二〇一〇年）にも同様の条件で作品を選択し、芦屋釜の鑄造技術の解明を試みている。今回の報告と合わせて参照されたい。



図12 鋳付（部分）

◎芦屋霰地松梅図真形釜 根津美術館蔵



図9 鋳付（部分）

芦屋松竹図真形釜 湯木美術館蔵

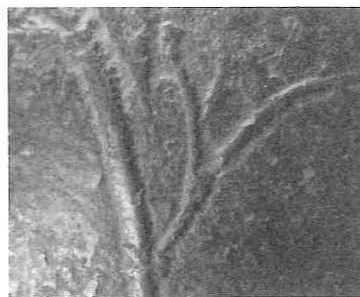


図7 文様際の凹状痕跡（部分）

芦屋松竹図真形釜 湯木美術館蔵



図4 芦屋霰地真形釜 芦屋釜の里蔵



図1 芦屋松竹図真形釜 湯木美術館蔵



図10 鋳付（部分）

芦屋霰地真形釜 芦屋釜の里蔵



図8 文様際の凹状痕跡（部分）

◎芦屋霰地松梅図真形釜 根津美術館蔵

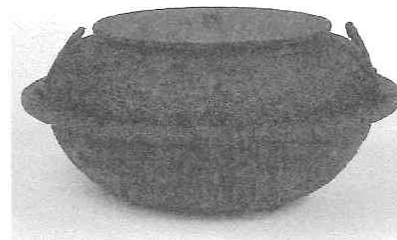


図5 無地平釜 芦屋歴史の里蔵



図2 芦屋霰地真形釜 美術工藝振興佐藤基金蔵



図13 鋳付（部分）

◎芦屋霰地松梅図真形釜 根津美術館蔵



図11 鋳付（部分）

芦屋松竹図真形釜 湯木美術館蔵

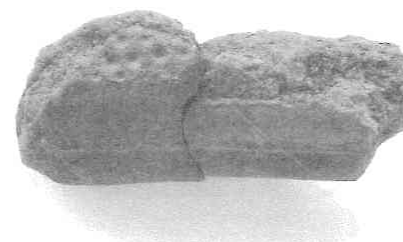


図6 金屋遺跡出土鋳型 芦屋歴史の里蔵



図3 ◎芦屋霰地松梅図真形釜 根津美術館蔵

謝辞

本稿を成すにあたり、石洞美術館・根津美術館・湯木美術館・芦屋町の各機関の方々にご協力を賜った。記して、深く感謝の意を申し上げる。

註

¹ 鑄型の隙間に溶湯がさしこんで固まったもの。

² 現代の釜師の中子造型法は、削り中子法（込め中子法）が多い。削り中子法は、外型に中子砂を込め、製品と同じ土塊をつくって抜き取り、それを厚みの分だけを削って溶湯の入る隙間を作り出す方法である。

※◎は重要文化財

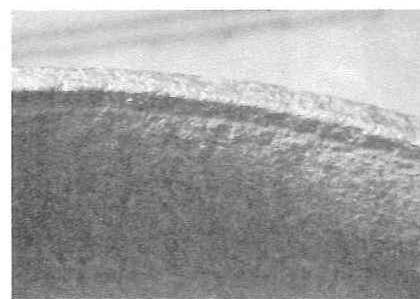


図 17 口裏内部の段差（部分）

芦屋霰地真形釜 美術工藝振興佐藤基金蔵

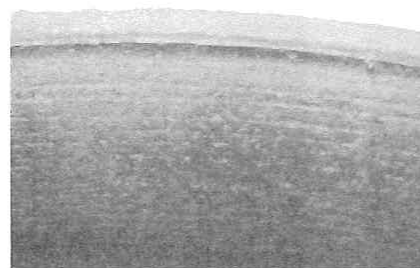


図 18 口裏内部の段差（部分）

芦屋釜の里復元製作釜

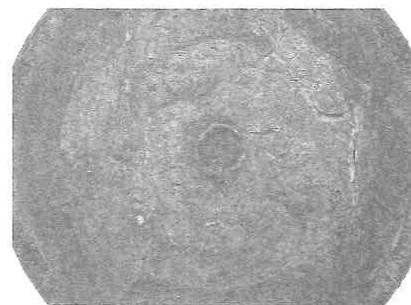


図 19 湯口の痕跡（部分）

無地平釜 芦屋歴史の里蔵



図 14 挽き中子法の様子

芦屋釜の里工房

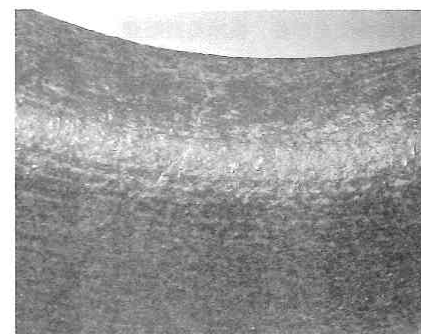


図 15 釜内部の挽き目（部分）

芦屋霰地真形釜 芦屋釜の里蔵

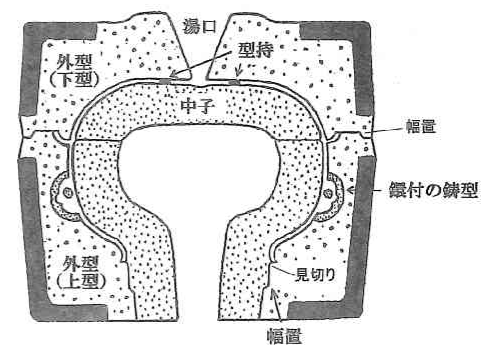


図 16 釜鑄型断面模式図